

乃至十念の仏意を窺う

…仏の口業と衆生の聞名との関係…

堅田 玄宥

伝統宗学が抱える課題は、第一に大行を法体名号として衆生の行位の称名を認めてこなかったことにあり、第二に、信前行後を標榜する信因称報説を踏襲して信心と念仏とを対立概念として扱い、念仏は信心獲得後の報恩感謝に限るとしてきたことに存します。これは、歴史的な能行・所行論争を通して、徒に自力排除に固執した結果であり、信心獲得に際して衆生の行の関与を認めないとしてしまいました。

然るに、衆生の行(プラクティス)を明示し得えずして、お聴聞の伝統のない現代社会にいかにしてか新たな他力念仏者の誕生・育成を期待しうるか憂慮これに過ぎたるものはないのではありますまいか。

本論文では、「大行とは無礙光如来の名を称するなり」と仰せ下さった行巻は親鸞聖人の御意を改めてお訊ねし直し、証巻を援用すれば、衆生の聞名は、証果の悲用として還相回向された仏八種功德の一、仏の口業(衆生の行)の実現を通して齎られるものであることを押さえて、宗学再構築の可能性を提起し、以て、他力念仏者誕生プロセスのダイナミズムを明らかにすることを目的とするものであります。

はじめに

第45回シンポジウムで「念仏とか信とかいうことはよく研究され、夥しい数の研究がありますが、名を聞くということ、聞名という思想についてなぜ研究されないのか、もっとそういうことを研究していくべきだ」(太田利生和上)という指摘がなされました(Ref P195)。

それについて、四十八願経の『無量寿経』成就文では「諸仏如来の讃嘆の名号を衆生が聞名することによる救い」が説かれる一方において、同第十八願文では、「聞名」が誓われず、「乃至十念」が誓われております。

そこで、その仏意を窺い、「乃至十念」が衆生の「聞名」に繋がるプロセスを明確化するのが本論文の本質的課題であります。

課題のありか

別科安心論題講義では、要するに「大行とは本願の名号である」として、それ以上の解説はありません。註釈版の「顕浄土真実教行証文類」解説を繙きますと「第二の行とは、本願の名号…行法である」とあります(Ref 註 P130)。

これは、衆生の行業を顧みない典型例であります。その妥当性を窺うにも、最初に伝統教学の概要をお訊ねしなくてはなりません。

その伝統教学では、第十七願を能所に二分し、称揚の「広讃」を無量寿経教説の側(能讃位)に据え、教説が説き明かす名号を所讃位だと理解し、

行巻はこの所讃の名号について説いたものだと解釈されて来たことが判ります(Ref P11)。

これでは、大行出体「大行とはすなはち無礙光如来の名を称するなり」が正しく名号を称える略讃(衆生の行位)であるにも関わらず顧慮されていないことになってしまいます。

これは妥当でありましょうや。果たして、親鸞聖人は、行巻の第二のご自釈「称名転釈」で「称名能破衆生一切無明、能満衆生一切志願。称名則是最勝真妙正業…(Ref 全 P8、註 P146)」とお示しです。この御文は、曇鸞大師の『往生論註』の「名号能破衆生一切无明、能満衆生一切志願。(Ref 全 P314、註 P103)」をそっくり借用されたものだとお示しされております。注目すべきは「名号」を「称名」とされた点であり、これは、行巻の主題が「名号」ではなくて、「称名」であることが明瞭に知られるところであります(Ref P130、P162)。

蓋し、親鸞聖人が衆生の行位たる称名について示そうとされているのに、名号と押えてきた伝統教学はこれを等閑視して来たものと窺われます。

これは伝統教学が長年に亘って能行・所行の論争を経て、衆生の称名と捉えては自力になる、名号と言わねば他力にならない(Ref P30)としてきたことに基づくものと考えられます。

これでは、浄土真宗は、伝統教学の許では、衆生の行を明示しない宗教となってしまったと言わざるを得ません。能讃位の教説といい、所讃位の名号といい、お聞かせに与る衆生にとっては教説

と名号法は変わりがないからです。

凡そ、衆生の行(プラクティス)を示し得ない宗教が歴史上延命を図り得た験しはなく、斯る事態は、お聴聞と言う伝統文化の礎のない現代社会(海外最前線)に他力の念仏のみ教えを広めるに大きな足枷となって来たのではありますまいか。

大悲の願(第十七願)より出でたり

法然聖人が「選択本願の行」と言えば、第十八願の「乃至十念」をさしておっしゃったのに対して、親鸞聖人は「乃至十念」の根底には諸仏如来の名号讃嘆が存するとして第十七願によって行を建立されこの願を「選択称名之願」と名付けられています(Ref P242)。

そこで願名を振り返りますと、行巻では、「大行は大悲の願(第十七願)より出でたり」とお示しになり、その願名を、「諸仏称揚之願」「諸仏称名之願」「諸仏咨嗟之願」「往相回向之願」「選択称名の願」とし(Ref 行巻、註 P141、全2-P5)、更に、『浄土文類聚鈔』に「往相正業の願」(Ref 註 P478、全2-P443)と名づくべしと仰せであります。

このうち、と が紛れもなく衆生の行位に当る称名の根拠であり、はその行自体が本願力廻向されている旨を示したものであります。

更に、及び も「諸仏とひとし」(Ref 註 P778、全2-P667)の視点から衆生の行位に当る根拠となります。

そうすると、願名を根拠に見た場合、衆生の行位たる称名を認めない立場は、親鸞聖人の御意に則していないことになって参ります。

ここはなんとか、先哲方のご苦勞のみ跡を尊重しつつ、伝統教学が固執した自力の関与の懸念を根底から払拭する方途はないのでしょうか。

私は、衆生行位の称名を無理なく認める根拠が実は本願力廻向に存するかと窺います。

では、そのような本願力廻向されている大行とは一体いかなるものかとして把握することができるでありませんや。

証巻「還相回向」の意図を考えてみる

二廻向四法の教学体系のうち「還相回向」は、浄土往生して後の衆生が如来の本願力に乗託し

て十方の穢土に還り来て大悲伝普化に馳せ参ずることになります。

しかるに、今生で直ちにその内容が実現されるわけではありませんので論題「往還分齊」を設けて厳しく誡めて来られたことでした。

元より如来様のお悟りの内容は、衆生に判る筈のものではありません。けれども、浄土往生して如来様の眷属にお加え戴ければすっかり判るものだとも聞かせて戴いております。

そうすると、今生の衆生に与えられた証巻(その殆どが還相回向)は、一体何の為に設けられているのかという疑問が生じて参ります。

古来、還相は、阿弥陀如来のお悟りの内容が浄土から働きだしている「証果の悲用」であると言われて参りました。

してみると、還相回向釈に示された依正二報の果徳のすべてが凡夫往生の往因を支えるものとして働いて居て下さると頂戴しなければならないのではありますまいか。

浄土真宗の救いが聞名による救いである以上、聞名及びその前提プロセスに係る功德が殊に重要となることは勿論であります。

これまで斯る発想がなかったのは、『教行証文類』真実五巻の理解では、正覚門の「証果の悲用」は、往生門の果のみに相対して示されていた(Ref)ことから裏付けられるかと窺われます。

中心は、仏八種功德の口業にあり

顧みれば、親鸞聖人は、善導大師の称名正定業説を受けて展開された法然聖人の教説を曇鸞大師の『往生論註』の教学によって後付け、本願力廻向の大行・大信として体系化されたものであります(Ref P149)。

申すまでもなく、曇鸞大師の場合には、回向の主体は、飽くまで浄土往生の行人であるのに対して、親鸞聖人の場合には、如来であるという百八十度の逆転があります。

それ故、証巻に明らかにされた功德は、浄土往生の行者の功德ではなくして、阿弥陀如来のお悟りの内容(功德)であります。

このことは、大経(下巻)に衆生往生の因果は弥陀成仏の果として説かれている(Ref P32)こと

からも裏付けられます。

その意味で、証巻引文の『往生論註』の御文、就中、「**仏八種功德**」が重要になって参ります。その中心になるのが「**いかなる声名かましますと知るべし、このゆゑに次に仏の口業を莊嚴したまへるを觀ず、すでに名聞(みょうもん)を知んぬ、よろしく得名のゆゑを知るべし**」と窺われます(Ref 証巻、註P317、全2-P109)。

「**名聞**」とは、名号のいわれがあらゆるところに聞こえることを申します(Ref 証巻、註P317)。

興味あることに、口語訳では一步進めて(下線部に留意)「**どのような名号をあらわされたのかを知らなければならない、そこで次に仏の口業にそなわる功德を觀ず、口業により仏の名号があらゆるところに聞こえることを知ったなら、その名号を得られた理由をしらなければならない**」とあります(Ref 証巻、現P348)。

ここで、原文では「**聲名**」とある(Ref 全P109)のに、口語訳で「**名号**」とされている個所は注意深く、原文の「**聲名**」に戻すべきかと窺います。

聲名の「聲」は、声に発生せられたものを耳で聞き留めると読みとれる大切の字だと窺えますから安易に置き換えてはならない筈だからです。

とまれ、この御文により、お名号があらゆるところに聞こえるのは、実は阿弥陀如来の口業に備わった功德だと頂戴できるのではありますまいか。

このようにみて参りますと、仏の口業自体が実は証果の悲用として還相回向されていたことが判るのであります。

そこで、いよいよ凡夫の浄土往生の往因が誓われた第十八願文の構造をお尋ねしてみましょう。第十八願文は次の通りです。

「**たとひわれ仏を得たらんに、十方の衆生、至心信樂して、わが国に生ぜんと欲ひて、乃至十念せん、もし生ぜずは、正覺を取らじ、ただ、五逆と誹謗正法とをば除く、**」とあります。

往相回向の主体は、阿弥陀如来であり、被回向者は行者ですから、選択本願の太いロジックは英文のSV00の構造で捉えうるかと窺います。

申すまでもなく、主語は、阿弥陀如来であり、間接目的語は、被回向者の行者になります。

では、残る直接目的語は、何かと窺えば、それ

こそが、証巻に明かされた「**仏の口業**」になるのではありますまいか。

かくして、第十八願文の「**乃至十念**」は、仏の口業を衆生の口業としてお与え下さったものに他ならないのであり、このことは、親鸞聖人が、六字釈で「**如来すでに発願して衆生の行を回施したまふの心なり**」とお示しになった通りであります(Ref 行巻、註P170全2-22)。

これは既に、善導大師、法然聖人が「**乃至十念**」の「**十念**」は「**十声の称名**」に当たると確定して下さった**師資相承**に則するものであり、一步進めてその本質(**仏回向の口業**)を明るみに出したことになるのではないかと窺われます。

このように、「**乃至十念**」を衆生の行として仏が回向して下さった仏の口業と頂戴することによって、「**称名**」が自力である懸念が払拭できるのであります。

蓋し『**選択集**』引用結釈で「**これ凡聖自力の行にあらず、ゆゑに不回向の行と名づくるなり**」(Ref 行巻、註P186、全2-33)と仰せの通りです。

大行とは、無碍光如来の名を称するなり

そこで、「**大行出体**」をみてみますと、その構造は、形から見て口業になります。証巻の還相回向に明かされた所回向の仏の口業が、行巻の往相回向では衆生の口業として明示されていることになります。

次に、口業の実体は、讚嘆門であります。

実は、この讚嘆門に照らして衆生の口業が諸仏如来の名号讚嘆に匹敵することになります。

如来回向の口業だったからです。

出拠については、何よりも親鸞聖人ご自身がどのようにお考えになっていたかをお訊ねするのが早道であるかと窺われます。

該当する御文は次の通りです。

まず、「**即嘆佛**」といふは、**すなはち南无阿弥陀佛をとなふるは佛をほめたてまつるになるとな也**と仰せであり(Ref 註P655、全2-587)、次に、「**願成就の文(大經・下)に『十方恒沙の諸仏』と仰せられて候ふは、信心の人とこころえて候ふ**」との浄信上書に対するご返事(『**末灯鈔**』第七通)で、聖人もまた、「**まことの信心の人をば、諸仏とひ**

としと申すなり」とされ、更に「信心まことなる人のところを、十方恒沙の如来のほめたまへば、仏とひとしとは申すことなり」とおっしゃっておいでであります(Ref 註 P778、全 2-P667)。

これらは、本願力廻向の帰結に基づく御文だと窺うことができます。

本願力廻向ならばこそ、衆生が称える仏名はそのま仏の口業の働いていて下さるお姿になるからです。南無阿弥陀仏と称えれば、ただちに「南無阿弥陀仏」と聞こえて下さいます。

これは、如来様の願いの通りに(三心即一の信楽)本願力廻向の如来様の口業を称えた効果ですから、聞こえて下さるときは、如来直々の勅命が聞こえて下さったと頂戴できるのであります。

これによって、諸仏如来の名号讃嘆(広讃・略讃の別なく)に匹敵する名号讃嘆がお喚び声となって聞こえて下さっていることとなります。

だから、衆生はその名号を聞いて喚び覚まされるのでした(本願成就文)。

喚び覚まされれば何故に歓喜しうるか、それは真の救い主との関係性の目覚めによるからだと窺うことができます(Ref)

斯かるプロセスアプローチを通して、嘗て「能所不二、鎔融無碍の法体大行」と観念的に折衷説明せられ、「称即名とまきあがる」(Ref)といかにも情的な表現に収束して見えた先哲方のご苦勞も、現代社会の念仏者の信心獲得の新たな実践的ロジックとしてご案内しうるかと窺います。

仏回向の口業を行ずることの効果

「南無阿弥陀仏」と称えましょう。すると聞こえて下さるものがある筈です。「南無阿弥陀仏」です。これがただ今お浄土から届いて下さった如来様直々のお喚び声です。このように承ることによって、衆生は、いつでもどこでもたった一人でも如来様のお喚び声に遇わせて戴けるのではないのでしょうか。

これを唯単に、私の声が聞こえただけだということではなく、如来直々のお喚び声と頂戴できるかどうか(三心即一の信楽如何)が衆生がお救いに与るかどうかの分かれ目となるかと窺います。

このようにご案内することは衆生に生活次元の行(プラクティス)を明示することとなります。

衆生はのご案内によってプラクティスを通して自ら宗教哲学的真実を体験することになります。首肯できなければさりげない日常生活を通してその謂れをお聴聞なさいませとお勧めできます。

結論

四十八願経の『無量寿経』成就文では「諸仏如来の讃嘆の名号を衆生が聞名することによる救い」が説かれる一方において、同第十八願文では、「聞名」が誓われず、「乃至十念」が誓われたその訳は、十方の衆生に間違いなく名号を聞かしたいたいの具体的なお手立てをお誓いになったものに相違ないことであります。

尚、このことは、既に、梯 實圓和上が「本願の念仏は、…私どもの上に具体的な行動となっている如来行といわねばならない。…私の迷妄の夢をよび覚まし続ける如来の口業の説法であり本願招喚の勅命だったのである(Ref P147)と仰せの通りでありました。合掌。

後書き

あるとき、「衆生の称える称名念仏はそれはそのまま諸仏如来の名号讃嘆に他ありません」とポツリと瓜生津 隆眞先生のお口から零れるのを耳にして私は震えるような感動を覚えました。先生のお口を通して、如来の直説をお聞かせに与った瞬間でありました。合掌

出拠

- (凡例)全 聖教全書、註 註釈版、現 現代語版
- ・ 教学研究鑽の立場と方法(龍谷教学第 45 号)
 - ・ 『真宗聖教全書三経七祖部』、『註釈版七祖篇』
 - ・ 『顕浄土真実教行証文類』
 - ・ 『浄土文類聚鈔』
 - ・ 『尊号真像銘文』
 - ・ 『如来二種廻向文』
 - ・ 『親鸞聖人御消息』(『末灯鈔真蹟七通』)
 - ・ 梯 實圓『法然教学の研究』
 - ・ 梯 實圓『教行信証の宗教構造』
 - ・ 信楽峻麿『教行証文類講義』、『行巻』
 - ・ 勸学寮編『浄土三部経と七祖の教え』
 - ・ 桐溪順忍『空華学轍の思想』(龍谷教学会議 昭 53 年富山大会記念講演)
 - ・ 別科ご本典講義資料 P2「真実五巻」の関係
 - ・ 関係性への目覚め
- <http://syohgakuji.web.fc2.com/2341.pdf> 以上